

日本基督教団
柿ノ木坂教会

牧 師 渡邊 義彦
協力牧師 松下 恭規

教 会 報

199 号 2020 年 9 月 13 日

〒152-0022
東京都目黒区柿の木坂
1-31-19
電話：03-3717-3870
Fax：03-3717-3916

「聖なる者とされること」

—テサロニケの信徒への手紙—第4章3節—

牧師 渡邊 義彦



実に、神の御心は、あなたがたが聖なる者となることです。

テサロニケの信徒への手紙—第4章3節
(新共同訳聖書)

テサロニケ教会が置かれている社会的な環境は、聖書の教えるところとは異なる結婚観をもって暮らしている世界です。結婚に基づかない男女の結ばれ方を容認する社会であり、結婚に対する忠誠や秩序から著しく逸脱することを容易に認めている社会です。このような異邦人、異教の社会にあって、まずキリスト教徒である以前に、ユダヤ人コミュニティは、聖書に基づく結婚観を堅く守り、周囲からも特異な共同体として存在してきました。一人の夫、一人の妻という一夫一婦制を守り、結婚外の性的な交わりを否定しました。神に喜ばれる社会の単位としての夫婦、また父母を要とする家庭形成をユダヤ人たちは重んじてきました。

十戒が、隣人との関係を定める最初の掟として教えるのは、第五戒「父母を敬え」という戒めです。わたしたちがこの地上に命を受けて、生み出されて初めて受け入れられる隣人関係は、母であり、父です。この関係が良いものであろうとも、悪いものであろうとも、生まれた赤ん坊は、母と、父と初めての隣人関係を持ちます。わたしたちの誕生後初めての隣人関係は父、母との関係に始っています。父、母の愛は、確かに完全ではありません。人間的な限界を持って

います。神が人間を愛されるとき、神の愛の完全さを、父、母の人間的な愛は備えてはいません。しかし、父、母は、たとえ不完全で欠陥のあるものであろうと、親としての愛をもって、子を愛し、育てることにおいて、神の愛の何かを、神の愛の幾分かを、子に伝える責任を託され委ねられています。父、母として、神の御心に適う結婚と夫婦のあり方を、父母としての責任を担うことを、ユダヤ人は教えられ学んできました。

聖書は、その冒頭から、神が、創造のはじめに人間を男と女という性別の秩序によって創造され、この男と女が結婚することによって社会の核となる、最小の単位を形作ることを最初の秩序となさったことを記します。聖書の言葉によって生きる民は、この結婚観を重んじます。性別にしろ、性差にしろ、また結婚においても破れや、欠陥、秩序の乱れがこの世界にあることを、聖書はもちろん知っています。しかし、この秩序の乱れは当然なことではないことを、聖書に言葉によって生きる民は、世界に問い続けてきたのです。

ユダヤ人たちを出発点として誕生したキリスト教会も聖書の結婚観を継承しています。キリスト教会も結婚を軽んじる社会生活を否定しています。ところが、このユダヤ人の間では共通のものとして理解されていた結婚のあり方が、異邦人の世界では当然のことではないということに遭遇していきます。ユダヤ教徒たちは、割

礼を記しとする独特のユダヤ人コミュニティを形成することによって、自分たちの結婚観や、倫理観を共有できる者たち同士で、自分たちのコミュニティの内に留まることで、結婚の貞節を守り異邦人世界に暮らしてきました。一方、キリスト教徒たちは、積極的に異邦人世界に入っていく、そこに福音を伝道する道を選択し、絶えず、異なる価値観との遭遇、衝突を経験し、課題を克服する道を選択してゆきます。ここで、テサロニケ教会に、パウロが、聖なる者となるよう勧める第一に、結婚を掲げて勧告しているのは、この異なる文化、価値観、倫理観との衝突に苦労している、生まれたばかりの若い教会への忠告と励ましなのです。

キリスト教は伝道的であり続けるので、福音が届けられる先では、聖書が教えるところとはまったく異なる考え方と遭遇せざるを得ません。けれども、福音を伝道することにおいて、そのような異なる価値観、倫理観を翻し転換することが、主たる第一の目的ではありません。第二次、第三次の課題として、副次的には、そのような異なる価値観の転換は起こり得るでしょう。しかし、この価値観や倫理観の転換が第一の目的ではありません。まず初めに必要なのは、生き方の問題ではなく、生活や、道德、倫理の問題ではなく、救いの問題です。キリストにより救われることが最初にあることです。キリストにより救われた者は、自ずと、その生き方、生活、人生において転換が生じるでしょう。しかし、この生活の転換は、救いの結果、生じるのであって、生活の転換そのものが救いでもなければ、生活の転換が救いをもたらすのでもありません。キリストの救いを信じ受け入れること、受け入れ信じたことを公にして告白することが、まずはじまりにあります。

聖なる者とされるとは、わたしたちが生まれながらに持っているものによって達するものではありません。わたしたちが生まれながらに持っているものは罪によって壊れてしまっています。わたしたちが自らは罪人であることを真剣に反省して、後悔して、そして神に真摯に向き直って救っていただかなくてはなりません。キリス

トに救っていただいて、なお、わたしたちは自らが罪人であることを一層深く自覚してゆくであります。そして、なお一層救われてあることがほんとうに喜ばしいことであり、素晴らしく絶大なことであることを理解してゆくであります。確かに、わたしたちは、一生をかけてもキリストの恵みの大きさすべてを理解するには至らないのです。聖徒たちは、生涯をかけても理解し尽くせない、キリストの救いの絶大な大きさの、より一層の、さらなる理解を次に続く聖徒たちに託してきたのです。わたしたちもそうです。もっと、広く、もっと遠くにまで、もっと高く、深く、キリストの救いの恵みが広く及んでいることを、わたしたちの生涯をかけて理解し、なお理解し尽くせないでいることを、わたしたちの後に続く聖徒たちに託してゆくことになります。

伝道は、聖徒たちが誕生してきたことのつながりですし、信仰が継承されてきたつながりです。救われた者たちの善き生活が、世界に神の善きものを届け広げてゆくのです。言葉において、行いにおいて、福音が一人でも多くの人に届けられることを祈り続け、願い続けるのです。このような聖なる者とされる、神の聖さを担う者とされることに、わたしたちは召されています。

集会出席統計(月平均人数)

	2020年	
	6月	7月
主日礼拝	58.5	58.8
聖書と祈り会	9.5	10.6
教会学校 *	73.7	64.5

* 保護者、教師を含む

(第1主日開催)	6月7日	7月5日
聖餐夕礼拝	8	6

「伝道とは－聖書に聴く」

むねすえ ただし
棟居 正

わたし達がなぜ伝道するのかは、ただ一つイエスさまが天にあげられたとき残された言葉に基づいていると言うことを先ず覚えたいと思います。

(マタイ：28：18～20)「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

ここにわたし達が伝道する根拠があります。伝道はまず「あなたがたは行って」とあるように、「わたしたち」に託された大切な役目だと言うこと。しかしそれはわたしたちの力でなく「イエスさまの権能によって」進むのだと言うこと。そこをきちんと押さえることが大事だと思います。

伝道は「わたくしたちの役目」と言うことをもう少し考えてみましょう。わたくしたちは「教会」です。教会の特定の人だけが伝道するのではないのです。教会は「わたくしたち皆」なのです。

教会は人が作ったものではありません。様々異なった人々が、神さまによって呼び集められた群れです。それを使徒信条では「我は公同の教会を信じる」と言い表しているのです。わたしたちは恵みによって集められた「神の子の群れ」です。その群れに与えられたイエスさまのご命令が「伝道」なのです。

しかし罪のあるわたしたち、それも言葉巧みでないわたしたちがどうやって伝道できるのかという不安があります。そこは1コリント12章で、「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である」と言って、教会には色々な肢体があ

ると教えています。伝道を言葉でする人達の専業ではないと言うことです。

使徒言行録の中でも、教会に集う人々が増えてきた時、使徒たちが教会員たちの食事の世話までするのが大変になってきたとき、

『わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することになります。』一同はこの提案に賛成し、信仰と聖霊に満ちている人ステファノと、ほかにフィリポ、プロコロ、ニカノル、ティモン、パルメナ、アンティオキア出身の改宗者ニコラオを選んで、使徒たちの前に立たせた。使徒たちは、祈って彼らの上に手を置いた。」とあって、信徒たちの日常の世話をする役目に7人の評判の良い人たちを選んだのでした。

このようにわたしたち教会には言葉で伝道する人々や色々な業を通して伝道する人々を神さまは備えてくださいました。

言葉で伝道しない人はどのように伝道できるのでしょうか。それはその人の「生き方」なのではないかと思うのです。では、伝道できる生き方になるにはどうすれば良いのでしょうか。わたしは教会学校で子どもたちに、それはみ言葉を聞き続けることだと言っています。日曜毎に礼拝に与り、説教に養われ、聖餐の恵みを受け続けていると、さすが罪あるわたしたちも変えられてくるのだと思います。わたしはそれを「イエスさまに似てくる」「イエスさまの香りを放つようになる」と言っています。もうひとつ最近強く感じるのは、日常み言葉に養われ続けることが必要ということです。ヨハネ福音書15章の「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があな

たがたの内にいつもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。」はそういうことを言っているのではないでしょう。伝道の不振を言うのなら、その原因は自分にないか顧みることが必要だと思います。

もう一つ最近気付いたことがあります。ルカ福音書の「イエスはガリラヤの町カファルナウムに下って、安息日には人々を教えられました。人々はその教えに非常に驚いた。その言葉には権威があったからである。ところが会堂に、汚れた悪霊に取りつかれた男がいて、大声で叫んだ。『ああ、ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。』イエスが、『黙れ。この人から出て行け』とお叱りになると、悪霊はその男を人々の中に投げ倒し、何の傷も負わずに出て行った。」と言う4章31節以下のお話です。

安息日の礼拝です。悪霊が追い出されたことが書いてありますが、これが礼拝の場であり、イエスさまがそこにいらっしゃる所で起こったことに気が付きました。

礼拝はイエスさまの臨在を覚える所です。イエスさまがいらっしゃるところでみ言葉を聞いているのです。何か修養会の為になるお話を聞きに来たのとは違うのです。わたしたちは聖日礼拝のために礼拝堂に入って礼拝に備える時、どれほどそこに主イエスがお出でになっていることを意識しているのでしょうか。もしわたしたちが皆もっとイエスさまの前に出ていることを覚えていたら、礼拝はもっとすごい伝道力を発揮するのではないだろうか。そう思いました。初めて教会にいらっしゃった方もそういう姿から何かをくみ取るに違いありません。何かの講演会に来たような態度では礼拝が伝道力に繋がらないのではないのでしょうか。

最後に「教勢の不振」と言うことに触れて見ましょう。7月号の信徒の友は「教会の合併、閉鎖」を特集しています。教勢の不振はもう随分前から起こっていることですね。伝

道の仕方が悪いという人もいますが、これが現代の姿なのだと思います。

教会学校で一年間ずーっと旧約聖書を読み続けた年がありました。イスラエルが乳と蜜の流れる土地に導き入れられてこの方、神さまの言葉に聴き従い続けた時はあまりないと言っても言い過ぎではないことを知りました。イエスさまも伝道なさっていた時代、イザヤの言葉を引いて、「あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。この民の心は鈍り、耳は遠くなり、目は閉じてしまった。こうして、彼らは目で見ることなく、耳で聞くことなく、こころで理解せず、悔い改めない。わたしはかれらをいやさない。」と言っているらしいです。

旧約の時代、神さまの言葉に従わなくなっていたのは、大体国が豊かで、繁栄した時だということに気が付きました。それはまさに今の世界の状況に似ています。生活に不自由がなくなると人間は自分が一番になって、神さまの言葉にまで心が届かなくなってしまう。

聖書はそういう中でこう勧めます。Ⅱテモテ：4の1～5です。「神の御前で、そして、生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト・イエスの御前で、その出現とその御国とを思いつつ、厳かに命じます。御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるのです。だれも健全な教えを聞こうとしない時が来ます。そのとき、人々は自分に都合の良いことを聞こうと、好き勝手に教師たちを寄せ集め、真理から耳を背け、作り話の方にそれて行くようになります。しかしあなたは、どんな場合にも身を慎み、苦しみを耐え忍び、福音宣教者の仕事に励み、自分の務めを果たしなさい。」

教勢が振るわない今ですが、伝道を進めてくださるのは神さまです。このテモテへの勧めにわたしたちも耳を傾け励まされて、淡々と与えられた教会のお仕事にみんなで携わっていきましょう。

<どうぞよろしく>

「遅ればせの受洗ですが どうぞよろしく」

まつだ しんいち
松田 眞一

今年5月、ペンテコステの礼拝で受洗しました松田眞一です。すでに教会でお世話になっている家内(町子)の誘いで、昨年10月から3か月、毎週土曜の夜の教会の伝道会(求道者会)に2人で参加し、渡邊牧師から色々ご教示を頂きました。これまで教会にはイースターとかクリスマス、バザーなど特別な催しの時に伺う程度でしたので、ゼロからの勉強です。

実は今年2020年の12月に私達は結婚60年になるので、遅まきながら夫婦揃ってキリスト者として記念日を迎えたい、との願いがありました。

私事で恐縮ですが、私達夫婦は1960年の4月、八雲の自宅近くの知人の紹介で見合いました。彼女は青山学院大卒業直後でしたが、既に受洗したクリスチャンでした。私の家は父母とも仏教徒ですが父は海外勤務が長かった事もあり、キリスト教に特に異和感はなく、私達は数か月交際して婚約し12月に結婚しました。式は彼女の希望で、所属していた阿佐ヶ谷教会の大村勇牧師の司式、披露宴の会場の関係で神田の三崎町教会を借りての結婚式でした。

私の勤務先が横浜だったので新婚から約7年は日吉の公団住宅で過ごし、生まれた2児が幼稚園に行く時期に八雲の実家に戻りました。家内は1969年に柿ノ木坂教会に転入し今日に至っています。長女の晶子は小学3年の時、友達と柿ノ木坂教会学校に。その後、彼女は恵泉女学園から、芸大オルガン科に進み、この間昭和55年に受洗しています。教会学校の先生、オルガンの奏楽等も務めていましたが、

教会員の鷺直樹兄と1990年に結婚、現在は三田に在住で渋谷教会に所属しています。私の両親は晩年千葉館山の農耕団地で余生を過ごし夫々九十歳半ばで他界、今は富士霊園で眠っています。家族としては一橋大学から日本板硝子に就職した長男健志が町田市在住、姉弟それぞれに2男児で4人の孫も就職(一人は内定)の段階です。



私自身の来し方ですが、父は九州久留米藩士の七男坊、母は富山県上市の出身。父は三井物産でインドのカルカッタ10年、結婚して大連勤務となり、私は昭和7年大連で生まれました。3年後父は単身ニューヨーク4年勤務で母子は東京に住むことになります。第二次大戦が始まり父は帰国、現在の八雲(当時は芳窪町)には昭和15年(80年前)に自宅を建て定着。私・弟・妹と3人は昭和19～20年の大戦末期に母の故郷富山の農村に疎開しましたが、直接の戦災は免れて戦後帰京、家は数回のリフォームなどで持ちこたえ今日に至りました。私は八雲小(当時は国民学校)から麻布学園中学～高校に進み、東大工学部土木工学科を昭和30年に卒業。

戦後の復興期から発展に向かう時期、私は三菱重工(当時はまだ3分割)の横浜造船所に就職、橋梁や水門等国土開発関連の構造物の部門に取り組みました。奥多摩小河内ダムの

水門扉、横浜ベイブリッジ・東京港のレインボウブリッジ等仕事は豊富で設計・製作・現地工事等に懸命に取り組んだ、充実の時代でした。子会社の社長等も終えて 2000 年にはリタイアしました。

退職後どのように過ごすか特に考えはなかったのですが、同年代の小、中高、大学、そして会社の同期仲間との親睦会、その世話役。

それらの仲間を介して家内共々街のコーラス、ハイキングのグループ、社交ダンス教室、近代の歴史勉強会等、さまざまな交流の場が出来て新たな楽しみが広がりましたが、今年は春先からのコロナウイルス騒動で、これらの仲間との催しが目下途絶えがちです。

以上、少々長くなりましたが今回受洗したばかりで、これから色々学ぶこと多々あります。

10 月には満 88 歳の米寿、知力・体力はどこまで保てるかわかりませんが、受洗後家内と 2 人で毎日、聖書を 5～10 ページずつ輪読しています。教会員の皆様にもお力添え頂きながら歩んでいきたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。

← 喜び日に

左からご長女・鷺晶子姉、
渡邊牧師、眞一兄、町子姉、
井澤（教補）、町子姉の姉君



☆☆☆ 教会の行事 ☆☆☆

◇今まであったこと

6 月の伝道月間 特別伝道礼拝としてささげられた。今年はコロナ感染症予防のため例年のように多くの方々に広く呼び掛けることはできなかったが、

6 月 7 日と 14 日 渡邊 義彦 牧師、

21 日 小泉 健 牧師（東京神学大学教授・成瀬が丘教会牧師）

コロナウィルス感染症対策のため、午後に予定されていた愛餐会は中止、

なお、当日午後、同牧師に講師をお願いして、C S 教師研修会が開催された。

28 日午後に予定されていた鷺晶子氏によるパイプオルガン・コンサートも中止となり、代わりに同日の礼拝の奏楽を同氏が担当された。

C S の夏季丹沢キャンプも中止となった。

「私の学院生活と合唱」

う え だ ち か え
上田 愛枝

わたしはぶどうの木、
あなたがたはその枝である。
人がわたしにつながっており、
わたしもその人につながっていれば、
その人は豊かに実を結ぶ。
わたしを離れては、あなたがたは
何もできないからである。

(ヨハネによる福音書 15 章 5 節)

これは私が中学、高校と過ごした福岡女学院の学院聖句です。

その当時の院長先生が度々話された言葉、「聖く、正しく、美しく、強く、賢く」ありなさい。

これは今も身体の中にしみついて私の頭の中にあります。女学院の教えが今も生きているんだと感じております。

女学院は1885年に創立し135年になります。伝統的に、英語と音楽に力をいれていました。

私は中学高校の6年間合唱部に在籍し合唱に明け暮れていました。

高校2年で合唱部長をしているときにコンクールで全国1位(名古屋大会)になったことも懐かしい思い出です。

これが現在の合唱活動の基になったように思います。

私の母が東洋英和に(麻布十番に住んでいた関係で)学んでいたこともあり、私も高校を卒業して東洋英和短大の英文科に学びました。娘2人、孫2人と4代にわたり東洋英和にお世話になっています。

私は中学1年生のクリスマスに受洗しましたが家族で只1人でした。

クリスチャンだった母方の祖母が私の受洗を大変喜んでくれたそうです。

3人の年子の子育ても一段落したころ又歌をやりたいと思い当時通っていた教会のオルガン奏者に紹介されて2つの合唱団に入りました。

ひとつは「東京スコラ・カントールム」(創立41年)でチャリティコンサートで、今までに25団体(献金先はキリスト教に基づいて



ぶどうの房の校章

社会福祉や教育関係の活動をしている所)に献金を捧げており、献金総額は千五百万円になります。

もう一つは「コーロエスプレッシーボ」(創立30年)で、毎年7月に群馬県榛名山麓にある高齢者ホームの皆さんを慰問するために有志が集まったボランティア

の合唱団です。

2011年の9月から昨年までの9年間は、福島県の東日本大震災復興支援コンサートをさせていただき現地の皆様に元気と感動をもらい逆に励まされて帰ってきていました。

恒例になった2つの慰問演奏旅行に加え東京、神奈川でもチャリティコンサートの活動を行っています。

一人では中々できない奉仕を大好きな歌で思いを同じにする仲間を与えられ、少しでも人様に喜んでいただけることを幸せに思っています。

福島の二本松のホールに「出会いは人生の宝」と額に書いてありました。これを見たときに合唱の仲間、福島の方々、榛名新生会の方々、ほんとに多くの方々と出会えたことは私の宝だと感謝しています。

3人の子供達のところに長男に男の子1人、女の子1人、長女に女の子2人、次女に男の子4人計8人の孫の夫々の大会や行事に出かけることを優先していましたし、現在も老骨に鞭打って仕事(歯科助手)をしています関係から教会に行くということの優先順位は大変低いものでした。

でも今年から教会会計の仕事をさせていただくことになり毎週行かざるをえなくなりました。これはきっと神様が今までの不誠実なわたしの信仰生活を改めるようにと導いてくださっているのかもしれないと思っています。「光の子らしく歩きなさい」と。

今月のメッセージ

——ホームページページ巻頭言——

ホームページには多くの情報が掲載されています。
ぜひご覧ください
<http://kakinokizaka-church.com>

「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」

(新共同訳聖書・ヨハネによる福音書第7章37～38節)

幼稚園の園児たちの礼拝でのことです。ちょうど、使徒言行録を読み終える箇所が、その日の礼拝のテキストでした。パウロがローマに到着し、身を拘束されながらも自由に福音伝道をする事ができたという報告の箇所です。この後、使徒はローマで殉教するのですが、それまでの年月、最後まで福音を宣べ伝えることに献身したのです。少し長い聖書朗読でしたが、子供たちはよく聞いていました。

今読んだところで、パウロさんという名前が聞こえた人、と尋ねてみると、8割、9割方の子供が手を挙げました。じゃあ、パウロさんを知ってる人は、と聞くと、少し、手の挙がる子が減りました。さらに、じゃ、パウロさんはどんな人、と聞いてみると、一人の子から「神さまのことを、たくさんの人にはなすのに、いろんなくににいった人」と答えが返ってきました。このように答えてくれた子は、年中さんの子です。このように答えてくれることを願ってはいましたが、園児には少し難しい質問かなと思っていただけに、この答えに本当に驚きましたし、うれしいレスポンスでした。

彼女は、お姉さん、弟君と一緒に、お母さん、お父さんに連れられて、毎週日曜日の教会学校に通って来ています。わたしたちの教会幼稚園

は、日曜日の教会学校は、保育日数に数えていませんし、園児たちの中で、また保護者の方たちの考えで、進んで通って来てくれる子たちを日曜日にも教会として受入れています。感染症が拡大して教会学校の出席人数がほんとうに少なくなったときにも、家族で礼拝に出席してきた子です。

この春から、教会学校では、使徒言行録に最初の教会の伝道をたどってきて、ここ数ヶ月、使徒パウロの伝道をいっしょに聞いてきました。ふだんは年齢別にクラス分けをして礼拝をしています。今は感染症のことを考慮して全学年の合同礼拝にしています。未就園児から高校生まで、そして保護者の出席もある中で、御言葉を取り次ぐ教師たちも苦勞していますが、ときには幼児向けには難しい説教もあります。また、普段なら、礼拝後の各クラスの分級で、礼拝テキストの理解を深めるためいろいろなフォローもできますが、この春から時間短縮のためこれも行えていません。そのような中で、彼女は、小さな頭で、心で、精一杯、使徒の伝道に想像を本当に豊かに膨らませていたのだな、と知らされて励まされる思いをしたのです。

彼女も、これから少女になり、青年になり、大人になる中で、幼いときに素朴に信じたことに、世の挑戦を受けることになるのかもしれませんが、けれども、彼女からも、必ず、主が注いでくださった泉の水が溢れて、人々を潤すことになるのを信じるものです。主が、この小さな魂をも確かに覚えていてくださるからです。

(牧師 渡邊 義彦)

——編集後記——

- ・棟居兄から伝道について、寄稿をいただきました。教会の大切な技を改めて考えることができ、感謝いたします。
- ・復活日に受洗された松田兄に紹介記事をお願いしました。共に主の証し人として歩んでまいりましょう。
- ・9月第一日曜日を「振起日」と言う慣わしもあります。暑さで緩んだ心を奮い起こし礼拝に備えましょう。
- ・編集委員の交代のお知らせです。長いこと編集委員を担当して下さった辻智子姉が、長老に選出され、伝道委員会の担当になられたので、代わりに中村知実姉に入ってくださいました。
- ・教会報へのご意見、ご感想をお寄せください。
(編集委員長 井澤浩一)

集会案内

主日礼拝 日曜日 午前10時30分

聖餐夕礼拝 第1日曜日 午後5時

入門講座 日曜日 午前9時30分

教会学校 日曜日 午前9時

(幼稚科、小学科、ジュニアチャーチ)

*ジュニアチャーチは中学生、高校生です。

聖書と祈り会 水曜日午前10時、午後7時30分

日本基督教団 柿ノ木坂教会

〒152-0022 東京都目黒区柿ノ木坂 1-31-19

電話 03-3717-3870 (教会・牧師館)

03-3723-3870 (ベテル幼稚園)

牧師 渡邊 義彦

協力牧師 松下 恭規